

汁の多さが求められた。このため、中国では15回程度、阿片汁の採取を行なった。15回も採取すれば、最後のほうではモルヒネ含有量は大幅に減少してしまう。しかし、中国の場合は、それでもかまわなかった。要するに、日本はモルヒネ、中国は阿片と、それぞれ注目するものが違っていたのである。

【3】日本は世界第一の麻薬生産国になる

薬物汚染として問題になる薬物には、①麻薬、②覚醒剤、③その他(幻覚剤など)がある。麻薬には、ケシから作られるものと、コカの葉から作られるもの(コカイン)がある。ケシの主な薬理成分はモルヒネである。モルヒネを含まないヒナゲシなどは園芸用になる。ケシから採取した阿片汁を乾燥させたものが生阿片である。

生阿片を加工して阿片煙膏を作る。阿片煙膏を吸煙する方式を、16、7世紀に中国人が発明する。古い時代に発明された方式なので、当然、効率が悪かった。だから、阿片中毒は比較的軽く、きちんと栄養をとってさえすれば、阿片中毒だけでは、まず死ななかった。阿片はモルヒネに比べ値段が高く、また、阿片吸煙はけっこう面倒であることから、金持ちの道楽になった。

生阿片から、工業的にモルヒネを作る。痛みどめの強い作用がある。ヘロインはモルヒネの組成を化学的に変えて作る。多幸感が強く、麻薬専用である。モルヒネ・ヘロインは純粋な工業製品であって、効き目が強いので、中毒者は大体、数年で死ぬ。注射器を使うので、取り扱いも簡便である。また、工業製品ということで、値段も比較的やすかった。このため、貧乏人の麻薬になった。19世紀末から出まわる。だから、20世紀以降の阿片問題は、同時にモルヒネ・ヘロイン問題でもあった。[本稿ではモルヒネ・ヘロインをまとめて「モルヒネ類」と記す。]

当初、日本はモルヒネを英・独両国から輸入していた。しかし、第一次世界大戦(1914~18年)で輸入が途絶してしまう。モルヒネの価格が暴騰し、混乱を招いた。そこで急遽、モルヒネの国産化をめざす。まず、1915年、星製薬が成功する。内務省は1917年、他の3社(ラヂウム商会、大日本製薬、三共)にもモルヒネの生産を許可する。こうして、以後、4社体制になる。

星一(はじめ)が社長であった星製薬は、最初にモルヒネ生産に成功したことで、大きく発展する。しかし、その後、政争に巻き込まれ、倒産してしまう。星薬科大学だけがその名残りである。ショートショートの小説家・星新一は息子である。彼は、倒産のいきさつを息子の立場から書き記している(星新一『人民は弱し官吏は強し』、文芸春秋社、1967年)。ラヂウム商会は戦時中、武田薬品工業に吸収される。モルヒネ生産の権利は武田薬品工業が引き継いだ。星製薬だけは倒産してしまうが、しかし、残りの3社はモルヒネの生産独占で、いずれも経営が安定し、日本を代表する大手の製薬会社になった。この3社が、現在もなお、モルヒネの(第一次的な)生産を

独占している。3社に対して、私は以前、戦前のモルヒネ・ヘロインの生産の数字を教えてくださいと申し入れたが、いずれの会社からも拒否された。日本がモルヒネの国産化に成功したのは第一次世界大戦の時である。以後、約20年の短期間に、日本のモルヒネ類の生産は世界第一になる。1935年(昭和10年)の国際連盟の統計によれば、日本のモルヒネの生産額は世界第4位、ヘロインは第1位(全世界生産額の4割弱を占めた。)、コカインも第1位(同3割弱を占めた。)であった。[日本は1933年に国際連盟から脱退している。しかし、その後もしばらくは国際連盟阿片委員会に統計資料は送っていた。]

モルヒネ類の国内消費はとくに多くはない。ということは、日本が、これだけ大量のモルヒネ類を生産したのは、国際条約に違反して隣国の中国に密輸していると疑われてもしかたがなかった。中国に密輸する見込みがあるからこそ、これだけ大量のモルヒネ類を生産するのではないかという疑いである。国際条約に違反して中国に密輸していると考えざるをえないほどの量のモルヒネ類を日本が生産していたことで、日本は当然、各国から輦蹙を買い、また、きびしく非難された。

モルヒネに比べ、ずっと作用が弱い磷酸コデインも、重要な医療品であって、医療の場で重宝された。この磷酸コデインは1931年に国産化に成功する。内務省所管の東京衛生試験所(官営工場)で、粗製モルヒネを原料にして作られた磷酸コデインは、政府専売になった。1938年、厚生省が新設され、国内の阿片政策を内務省から引き継いだ。また、外地における阿片政策については、興亜院、さらに大東亜省が調整機関の役割を果たした。

日本の敗戦直後の1945年11月、GHQはケシ栽培およびヘロイン生産を禁止した。ケシ栽培のほうは1954年に復活する。阿片を原料とするモルヒネは、一方ではなくては困る医療品だったからである。しかし、ヘロイン生産はその後、ずっと再開されていない。禁止されたままである。麻薬専用のヘロインは生産されなくても、医療の場ではまったく困らない。結局、戦前の日本は、なくても全く困らないヘロインを、全世界の生産額の4割も作っていた。これを麻薬大国といわずして、なんといおうか。

【4】モルヒネの3つの用途

モルヒネは一方で強い痛みどめの作用があった。また、他方で麻薬でもあった。モルヒネには、次の3つの用途があった。

①民需用。日本では19世紀末になって、医療の場で使われる。第一次世界大戦で輸入が途絶したため、モルヒネが品不足に陥り、価格が暴騰する。その後、前述したように国産化された。現在、末期ガンの患者の痛みどめとして多用されている。そのため、モルヒネに対する需要が増す。今日、原料阿片はインドから輸入している。1994年度115トン、1995年度63トンである。これだけ大量の原料を輸出できるということは、現在もインドには広大なケシ畑が広がっているのである。これらの原料阿片から、前述の3